

# 病理診断科

## 〔到達目標〕

\* 病理診断科では以下の2課題について指導を行う。

1. 新医師臨床研修制度で必修項目のCPCレポート作成 (CPC研修) 支援
2. 選択研修としての病理診断科研修

### 1) CPC研修

#### 【CPCレポートの定義と義務】

CPCとは「臨床病理検討会」のことであるが、初期研修では、研修医が自ら診断・治療に関与し、臨床的な問題点の解決のためにご遺族から病理解剖の許諾を得て病理解剖に立ち会い、病理医の指導のもと肉眼および組織所見をまとめ、臨床経過を含めて症例を統括して検討する会をCPCと言い、CPCをまとめた報告書をCPCレポートと定義する。卒後臨床研修医は2年間に少なくとも1例CPCレポートを作成し、症例を呈示することが義務付けられている。

#### ■GIO (一般目標)

- (1) 研修医は、病理解剖を通じて、臨床診断の妥当性、死因を含めた病態、治療効果等を把握し、疾患の本態を総合的に理解する能力を身につけることが出来る。
- (2) 病理解剖の許諾を得ることと同時に、ご遺族に病理解剖の結果を説明することを通じて、医師としての態度、倫理観および人間性を涵養することが出来る。
- (3) 研修1年次に終了していることが望ましいが、遅くとも2年次の前半までに終了する。

#### ■SBO (個別学習目標)

- (1) 病理解剖の法的制約・手続きを説明できる。(想起)
- (2) ご遺族に対して病理解剖の目的と意義を説明できる。(解釈)
- (3) ご遺体に対して礼を持って接する。(態度)
- (4) 臨床経過とその問題点を適格に説明できる。(問題解決)
- (5) 病理所見(肉眼・組織像)とその示す意味を説明できる。(問題解決)
- (6) 症例の報告ができる。(解釈)

#### ■LS (CPC研修の実際の過程)

下記LSは専門医と研修医の間で個別に時間を調整しながら行います。

- ① 専門医の指導のもとで病理解剖に参加する
- ② 臓器の切り出しや病理組織所見のまとめを専門医の指導のもとで行う
- ③ 臨床経過および病理解剖結果から、症例の病態生理をまとめる
- ④ CPCを行い、CPCレポートを作成する

### 2) 病理診断科研修

#### 【概要】

本コースは、学生時代の必修の病理実習とは異なり、病理に興味があったのでもう少し勉強してみたいと思う研修医のための3ヶ月コースです。なお希望により3ヶ月コースを短縮した1ヶ月コースも可能です。

3ヶ月(12週)の研修期間内に、病理診断科の研修を通して、最終診断に至る病理学の役割と疾病の病因病態や転機を学び、最終的には臨床病理報告を行って医療の質の向上に寄与する。研修の終了時には日常の病理診断業務は単独で可能となる。本コースは将来内科系、外科系に進路を考えている研修医は積極的に選択することを勧めるが、逆に全く病理診断と関係が薄い診療科を考えている研修医も、疾病の発病機構を理解する上で多いに役立つ。また本コースを選択すれば卒後研修項目に義務化されているCPCレポート作成・報告が優先的に行える。

### ■GIO (一般学習目標)

研修医が生検組織や外科切除組織の病理診断や細胞診断を通じて患者の診断と治療に深く関わり、また病理解剖やその報告を通じて疾病を総合的に理解する能力を身につける。

### ■SBO (個別学習目標)

以下の項目を、1～4週は指導医が主体で研修医は見学あるいは一部参加、

5～8週目は研修医が主体で指導医は助言、6～12週は研修医が主として行う。

(1ヶ月コースの場合も下記項目を研修します)

(1) 外科病理診断 (20～30例/日、約5,000例/年)

- ① 生検組織や外科切除組織の切り出し
- ② 技師が作成した標本を翌日診断
- ③ 指導医の二次チェックを受け最終診断報告

(2) 術中迅速診断【5～10例/週】

(3) 細胞診【二次チェック 5～10例/週】

(4) 病理解剖【約10例/年】はCPC研修に準じます。

### ■LS (CPC研修の実際の過程)

- ① 研修の終了時には日常の病理診断業務は単独で可能となる。
- ② 将来的に病理専門医を目指す研修医は別途コースがあります。指導医に相談して下さい。